吹奏楽・合唱「新しい様式」と

涙と笑みと 歌う喜び東京から

秋空が広がった東京・府中の森芸術劇場に、歌声が響いた。都合唱連盟が10月24、25日に開いた東京コーラルフェスティバル2020。2日目の合唱祭では35団体、約千人が次々とステージに立った。

「このときを待っていました」「お客さんの前で歌えて幸せです」。ほとんどの人にとって、春先以来となる発表の場。笑みがこぼれ、中には目を潤ませる人もいた。

文化活動の中でも感染リスクが高いとされる合唱だが、都連盟は「しっかり対策をしたうえで、感染者の多い東京から発信する」と、開催に踏み切った。

全日本合唱連盟とともに8月に実施した実証試験では「発声する方向への飛沫(ひまつ)到達距離は、日本語は最長61センチ、ドイツ語は同111センチ」との結果が得られた。これをもとに、コーラルフェスでは「前後の間隔を1・5メートル空けて歌い、マスクを着けるかどうかは個々の判断に任せる」とした。

手作りの合唱用マスクで歌う小金井北高コーラス部＝10月25日、東京都府中市

飛沫の実験ふまえ間隔 生徒手作りマスクも

ステージでは全員マスクを外す団もあれば、マスク姿が混じる団も。

都立小金井北高校コーラス部は、全員が家庭科の時間に手作りした「合唱用マスク」を着けて臨んだ。前に布を垂らしたマスク越しに、横山潤子の合唱曲集「笑いのコーラス」から「贈り物」を披露。高橋駿太部長（2年）は「手作りマスクは歌いやすかった。久しぶりで緊張したが、楽しく歌えました」と笑顔だった。

日ごろは、どの合唱団も練習場所の確保に頭を悩ませている。施設の多くは定員の半分までしか入れず、「適当な場所が見つからない」「大きい部屋を借りて出費がかさむ」との声が聞かれた。神奈川県から参加した女性によると、いつも借りていた公民館は「9月からハミングなら可、10月からマスクつきで歌う練習がやっと認められた」。

集まって心置きなく歌えるようになるまで、苦労の日々は続く。（高山顕治）